

エスチャリー魚類の生物地理組成に基づく 日本列島の海洋気候帯区分

○緒方悠輝也（宮崎大学大学院農学工学総合研究科）
・村瀬敦宣（宮崎大学延岡フィールド）

西村（1992）は、海洋動物群集の分布パターンに基づいて日本列島周辺の海域を7つの海洋気候帯区として区分した。この分類は、日本列島の地形や海流の特徴を反映しており、これまでの海洋生物地理学的研究の基盤情報とされてきた。一方で、この気候帯区分の根拠となる動物群集の種名や、分布に関するデータは示されておらず、その妥当性についてこれまでに検証されていなかった。また、近年の各地域における魚類相の研究成果により、上記の気候帯区分には改訂の必要性が出てきたことも否めない。本研究では、近年報告された沿岸性魚類相調査の結果および冬季水温の分布データを基に、西村の海洋気候帯区分について再検討するとともに、この区分の妥当性を、日本列島のエスチャリー（淡水と海水が混合する半閉鎖的環境）魚類群集の分布データを基に検証した。海洋気候帯区分の再検討の結果、明瞭に区別される4つの海洋気候帯区（北日本；本土内湾域；本土黒潮流域；南西諸島）が見出された。この気候帯区分の妥当性の検証のため、日本列島のエスチャリーに出現する魚類の文献情報を集約し、各魚種を3通りの生物地理組成（冷温帯種・暖温帯種・熱帯種）に分類し、各気候帯区分内にある複数地点でそれぞれの組成の種数と多様性の割合を算出し、気候帯区分間でこれらの数値の比較を行った。その結果、冷温帯種は北日本、暖温帯種は本土内湾域および本土黒潮流域、熱帯種は南西諸島で有意に種数が高くなった。特筆すべきこととして、ほぼ同じ緯度間でも気候帯区が異なると熱帯種の割合が有意に異なることが明らかになった。以上の結果より、今回定義した新たな海洋気候帯区分の妥当性が示されたと言える。一方で、北部は既往のデータが不足していたために、今回分類した北日本の中に複数の気候帯区が含まれている可能性が残されている。従って、今後は日本海や北海道の沿岸における魚類相データの充実が必要である。